８　豚抗酸菌症対策におけるELISA抗体検査利用の検討

南丹家畜保健衛生所
○山本哲也　種子田功

【はじめに】豚抗酸菌症は、と畜検査において摘発され内臓全廃棄等の経済的損失の原因となり、公衆衛生上での問題も懸念される。と畜検査データから本症の内臓廃棄率が高い管内養豚場（母豚80頭規模一貫）の対策を実施するため、ELISA抗体検査の利用について検討した。【材料および方法】ヨーネ病診断用の*Mycobacterium avium*亜種精製抗原固相化プレートと酵素標識抗豚IgG抗体を用いてELISA法を実施した。①豚70頭の血清OD値の分布状況等を調査した。②母豚28頭の鳥型ツベルクリン検査（Tb検査）とOD値等について比較した。【結果】①豚血清70検体のOD値（平均±S.D）は0.20±0.10（範囲：0.04～0.52、中央値0.17）であった。OD値0.3以上の高値を示した豚は、30か月齢以上のものが多かった。②Tb検査を実施した母豚28頭の陽性率は78.6%（22/28）で、OD値は0.16±0.08（範囲：0.07～0.37、中央値0.14）であった。Tb検査結果とOD値に相関は認めなかったが、高OD値を示した豚はTb検査陽性であった。Tb検査結果及びOD値と比較するため、糞便細菌検査を実施中。【考察】ELISA抗体検査は、豚への負担が少なく、検査手技も簡易で有用であるが、本試験ではTb検査結果との相関を認めなかった。しかし、若齢やTb検査陰性の豚でも高OD値が確認されており、更に例数を重ね細菌検査結果やと畜データ等とあわせて分析するとともに、ELISA法の条件等も精査し、本検査の利用について検討を継続していく。